

氏名(本籍)	織 井 優 貴 子 <small>おり い ゆ き こ</small>
学位の種類	博士(障害科学)
学位記番号	医博(障)第47号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科 (博士課程) 障害科学専攻
学位論文題目	生活習慣病に対する性格の影響－Short Interpersonal Reactions Inventory日本語短縮版33項目を用いた分析

(主査)

論文審査委員	教授 福 土 審 教授 久 道 茂
	教授 上 月 正 博

論 文 内 容 要 旨

生活習慣病の危険因子としての性格傾向を測定する Short Interpersonal Reactions Inventory (SIRI) 日本語短縮版 33 項目 (以下, SIRI33-J と記す) によって識別される性格は, 以下の 6 つに分類される。すなわち, タイプ 1 は「社会的同調性が高い」, タイプ 2 は「不安が強く, ワーカホリック傾向が高い」, タイプ 3 は「敵意性が高く, 社会的望ましさ, 反情緒性, 完璧主義, ワーカホリック傾向が低い」, タイプ 4 は「神経症性が低い」, タイプ 5 は「社会的望ましさ, 合理性, 反情緒性, 完璧主義傾向が強く, 敵意性が低い」, タイプ 6 は「合理性, 社会的同調性が低い」という傾向を示す。SIRI33-J の得点の高低は生活習慣病基礎因子に影響し, 主観的健康観は生活習慣病基礎因子の高低により変化する, という仮説を 3 年間にわたる健康診断受検者 196 名において検証した。

心理社会的因子として 1) 生活習慣質問表, 1) 食行動質問表, 3) Short Interpersonal Reactions Inventory (SIRI) 日本語短縮版 33 項目 (SIRI33-J), 4) 日本版 STAI 状態・特性不安検査 (STAI), 5) SRQ-D (Self-Rating Questionnaire For Depression), 6) A 型傾向判別表, 7) MOS Short-Form 36 Item Health Survey (以下, SF-36 と略す) を用いた。生活習慣病基礎因子は, Body Mass Index (BMI), 収縮期血圧 (SBP), 拡張期血圧 (DBP), 総コレステロール (TC), 中性脂肪 (TG) を抽出した。

心理社会的因子の再現性を明らかにするために, 1998 年から 2000 年の 3 年間の相関分析を行った。また, 生活習慣病基礎因子と心理社会的因子との間の関連性を明らかにするために, 3 年に渡る各データを基に BMI 25 kg/m², SBP 130 mmHg, DBP 85 mmHg, TC 220 mg/dl, TG 150 mg/dl を基準として正常値群と異常値群に分け, 両群間に心理社会的因子の差を検討した。SIRI33-J は基準得点, STAI, SRQ-D, A 型傾向判別表それぞれの判定値を基準として高値低値にわけ, 両群間の生活習慣病基礎因子の違いを検討した。経年的な生活習慣病基礎因子の縦断的变化を, 基準値を基にして正常値から正常値であった群, 正常値から異常値に変化した群, 異常値から正常値に変化した群, 異常値から異常値であった群の 4 群に分類し, それぞれの群においての心理社会的因子を検討した。さらに, 生活習慣病基礎因子と心理社会的因子間で相関分析ならびに重回帰分析を行った。

SIRI33-J の経年的な得点は, 強い相関が認められた。また, SIRI33-J をタイプ別に特定し, 年余にわたるタイプの一致率は, 46.9%であった。タイプ 4 得点では, SBP N 群において, 高得点の傾向が認められた。2000 年では, SBP N 群が A 群より有意に高得点であった。DBP では, 両群間に経年的な傾向は認められなかった。QOL 指標の SF-36 の 8 下位尺度と生活習慣病

基礎因子のそれぞれの N 群, A 群を比較した。日常役割 (精神) (RE) において, SBP N 群が有意に高得点であった。活力 (VT) では, DBP N 群が有意に高得点であった。全体的健康観 (GH) において, SBP N 群が有意に高得点であった。また, 身体機能 (PF) は, DBP N 群, BMI N 群が A 群よりも有意に高得点であった。その他の生活習慣病基礎因子の両群と他の QOL 得点の比較では有意差は認められなかった。どの程度の血圧の変動が QOL に影響を及ぼすかを検討するため, 血圧値を正常値群, 正常高値群, 未治療高血圧群, 治療高血圧群, のそれぞれ 4 群に分け QOL 得点の差を Kruskal-Wallis 検定で検討した。体の痛み (BP), 全体的健康観 (GH) において, SBP 4 群に有意差が認められた。体の痛み (BP) では, 治療高血圧群が最も低い値を示した。また, 全体的健康観 (GH) においては, 未治療高血圧群と治療高血圧群はほぼ同程度の低い値が示された。身体機能 (PF) では, DBP 4 群に有意差が認められた。未治療高血圧群でその得点は最も低く, 治療高血圧群よりも低い値であった。重回帰分析では TC とタイプ 4 に経年的に関連性が認められたが寄与率はわずか 4 %程度であった。タイプ 4 において, 高値群の SBP, TC, TG は低値群よりも低い値をとることが経年的に示されたが, 低値群との有意差は認められなかった。

血圧値と SIRI33-J で示したタイプ 4 との関連性が示唆された。すなわち血圧値が正常に保たれるためには, 自律性が何らかの役割を果たしていると考えられた。また, 血圧値の上昇が QOL の低下に結びつく可能性が示唆された。生活習慣病と性格の関連性については, 経年的な更なる検討が必要である。

審査結果の要旨

織井優貴子の提出論文「生活習慣病に対する性格の影響」の第1次審査において、本人の返答書を必要とする大幅な訂正を求めた。対象に関する記述と分析を加え、図表を訂正し、考察部分に第1次審査員の意見を取り入れるなどの適切な改訂がなされた。その結果、論文内容が改善した。

特定の性格が生活習慣病を引き起こすことが欧米で明らかにされつつあるが、本邦ではその明確な証拠はない。本研究の目的は、性格が生活習慣病基礎因子に影響し、主観的健康観は生活習慣病基礎因子の高低により変化する、という仮説を検証することである。

方法は、1998年から2000年の3年間にわたる健康診断受検者196名を対象とし、心理社会的因子として1)生活習慣質問表、2)食行動質問表、3)Short Interpersonal Reactions Inventory (SIRI)日本語短縮版33項目(SIRI 33-J)、4)日本版状態・特性不安検査(STAI)、5)SRQ-D (Self-Rating Questionnaire For Depression)、6)A型傾向判別表、7)MOS Short-Form 36 Item Health Survey (SF-36)を調査した。生活習慣病基礎因子は、Body Mass Index (BMI)、収縮期血圧 (SBP)、拡張期血圧 (DBP)、総コレステロール (TC)、中性脂肪 (TG)を抽出した。

結果は、SBP正常群はSIRI 33-Jのタイプ4得点が経年的に高得点の傾向にあり、2000年には、SBP正常群が異常群より有意に高得点であった。SF-36の8下位尺度と生活習慣病基礎因子のそれぞれの正常群と異常群を比較すると、SBP正常群が日常役割(精神)、全体的健康観、DBP正常群が活力、身体機能、BMI正常群が身体機能について有意に高得点であった。血圧値を正常値群、正常高値群、未治療高血圧群、治療高血圧群の4群に分けSF-36の下位尺度をみると、体の痛みと全体的健康観において、SBP4群に有意差が認められ、身体機能では、DBP4群に有意差が認められた。重回帰分析ではTCとタイプ4に経年的な関連性が認められたが寄与率は4%程度であった。

SIRI 33-Jのタイプ4は神経症性が低い自律的性格を示す。血圧値や総コレステロールを正常に保つために、自律性が何らかの役割を果たしていることが示唆される。また、血圧値の上昇がquality of life (QOL)を低下させることが示唆された。生活習慣病と性格の関連性については、経年的な更なる検討が必要である。

提出論文は、わが国におけるSIRI 33-Jで判定される性格と生活習慣病との関連を検討する端緒となりうる点で、また、生活習慣病によるQOLの低下を健康診断受検者で示した点で、新しい知見を提供するものである。よって、学位に値するものとして、審査を終了した。